

小島柳原遺跡群

# 宮西遺跡

長野電鉄株式会社・株式会社長野ジャンィ  
中保住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994・3

長野市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、中保住宅地造成事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、長野電鉄株式会社・株式会社長野ジャシイの委託を受け、長野市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査地は、長野市大字柳原字宮西地籍に位置している。隣接する中保遺跡の範囲内となる可能性もあるが、調査地北西に遺跡範囲がのび、別遺跡となる可能性も高い。よって、今回の報告にあたっては、調査地の字名をとり宮西遺跡として報告する。これはあくまで仮称であり、正式名称については将来的課題とする。
- 4 遺構の測量は、有限会社 写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20縮尺の基本原図を作成し、本書では、あらかじめ断りのない限り基本的に1：80縮尺に統一してある。また、遺物実測に関しては、土器1：4・土器拓影1：3を基本としている。
- 5 本書作成における作業は各調査員が分担し、執筆・編集は千野・寺島が担当した。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（担当 長野市埋蔵文化財センター）で保管している。

## 目 次

I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査体制	2
II 小島柳原遺跡群の環境	3
III 調査	5
1 調査概要	5
2 遺構と遺物	6

## 挿 図 目 次

図1 調査地および周辺字名	1	図19 10号住居址出土土器拓影①	13
図2 調査地周辺の遺跡分布	3	図20 10号住居址出土土器実測図	14
図3 調査区全測図	5	図21 10号住居址出土土器拓影②	14
図4 1号住居址実測図	6	図22 11号住居址実測図	15
図5 1号住居址出土土器実測図	6	図23 11号住居址出土土器拓影	15
図6 1号住居址出土土器拓影	6	図24 1号溝址出土土器実測図	15
図7 2号・3号住居址実測図	7	図25 1号周溝墓実測図	16
図8 2号住居址出土土器実測図	8	図26 1号周溝墓出土土器実測図	17
図9 3号住居址出土土器実測図	8	図27 1号周溝墓出土土器拓影	18
図10 3号住居址出土土器拓影	9	図28 2号周溝墓実測図	18
図11 4号住居址実測図	9	図29 周溝墓土層断面図	19
図12 4号住居址出土土器実測図	10	図30 2号周溝墓出土土器実測図	19
図13 4号住居址出土土器拓影	11	図31 7号溝址実測図	20
図14 5号住居址出土土器実測図	12	図32 2号土壇出土土器実測図	20
図15 8号住居址実測図	12	図33 5号土壇出土土器実測図	21
図16 8号住居址出土土器拓影	12	図34 6号土壇出土土器実測図	21
図17 9号住居址出土土器実測図	13	図35 6号土壇出土土器拓影	21
図18 10号住居址実測図	13	図36 遺構外出土土器実測図	21

## 序

長野盆地は、東縁に上信越国立公園山系より延びる火山性の東部山地、西縁を海底等の隆起による堆積性の埴川丘陵山地に囲まれ、南北に長く形成されています。そして盆地内部においても、千曲川によりもたらされた沖積地、それに注ぎ込む大小の河川による扇状地が発達しております。このような複雑多岐にわたる地形の上に私達の長野市が成り立っています。そこにはそれぞれの地形や立地に応じて様々な生活や生産活動が見られ、古代から営々と続いてきた人々の英知の集合を見ることができます。

当遺跡の所在する小島柳原遺跡群は、千曲川左岸に形成された自然堤防上に展開する遺跡群で、近隣する浅川扇状地遺跡群とともに長野盆地の北部を代表する遺跡群であることは周知されているところであります。ここにお届けいたします長野市の埋蔵文化財第64集には、このたびの発掘調査によって得られた成果が詳しく掲載されております。連絡と綴られてきた人々の歴史のなかのほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力をいただきました長野電鉄株式会社・株式会社長野ジャシイの関係者各位と地元の方々、報告書刊行に至るまで、ご援助・ご指導を賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

長野市教育委員会

教育長 滝澤忠男



## 2 調査体制

### 調査主体者

長野市教育委員会 教育長 滝澤 忠男

### 調査機関

長野市埋蔵文化財センター	所長	荒井 和雄
	所長補佐	山中 武徳
	所長補佐	矢口 忠良
庶務係	係長	山中 武徳
	職員	青木 厚子
調査係	係長	矢口 忠良
	主査	青木 和明
	主事	千野 浩
	主事	飯島 哲也
	専門主事	羽場 卓雄
	専門主事	太田 重成
	専門主事	清水 武
	専門員	中殿 章子
	専門員	横山かよ子
	専門員	笠井 敦子
	専門員	山田美弥子
	専門員	寺島 孝典
	専門員	西沢 真弓



表土剥ぎ作業



調査風景

調査員 矢口 栄子・青木 善子

発掘作業参加者 松浦サトミ・大和 笑子・辰野 政治・松田もと江・水野 貞子・小林紀代美・鈴木 友江・待井 春子・清水 七男・徳永 一・松尾よし子・中村 忠彦・宮沢美代子・中島 芳江・清水かおる・関川 幸子・宮沢つね子・松田なか子・松田美恵子

整理作業参加者 小泉ひろ美・向山 純子・西尾 千枝・武藤 信子・徳成奈於子・岡沢 治子・池田 見紀

測量委託 有限会社 写真測図研究所

発掘調査を遂行していくうえにおいて、多くの方々にご支援ご助力をいただいている。現地調査に際して長野電鉄株式会社・株式会社長野ジャシ関係諸氏にはプレハブ・重機・配水ポンプ等の手配など、その都度便宜はかっ  
ていただいた。極寒の悪条件の中、地元の発掘作業員の皆様方には多大なるご尽力をいただき、また飲料水の提供を  
していただいた関川一志様方には、感謝申し上げる次第である。このたびの調査でご支援ご協力を賜った関係各位  
に、重ねてお礼申し上げます。

## Ⅱ 小島柳原遺跡群の環境

長野市城隍川以北には、浅川扇状地遺跡群・小島柳原遺跡群という大きな二つの遺跡群が存在する。前者は浅川によって形成された広大な扇状地上に立地する遺跡群であり、後者は千曲川左岸に形成された自然堤防上に展開する遺跡群である。中俣遺跡は後者の北東端に位置する遺跡で、今回の調査地点は中俣遺跡の南端に所在している。以下中俣遺跡周辺の正式調査を経た遺跡の概要を述べ、小島柳原遺跡群の環境とする。

### 1 中俣遺跡

#### ① 中俣土地区画整理事業地区地点

長野市中俣土地区画整理事業にともない、昭和63年度から平成2年度にかけて約6000㎡にわたる発掘調査を実施した。想定される中俣遺跡範囲の中央部分に位置する。調査では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落跡が検出され、特に中期後半の栗林式期における集落は規模も大きく、住居址19軒・土坑19基・溝跡2本をそれぞれ検出している。ほぼ同時期に展開すると見られる千曲川下流の中野市栗林遺跡、上流の松代町松原遺跡などの大規模集落の存在を考慮するならば、千曲川の河川交通を中心に形成された戦略的ネットワークに組み込まれた、一つの拠点集落として把握される可能性も高い。



図2 調査地周辺の遺跡分布 (1:20,000)

また弥生時代終末から古墳時代初頭に比定される13号溝跡からは、大量の外來系土器群の出土を見た。北陸地方を中心に東海や近江地方の影響を示す土器群も出土している。さらに遺構外からの出土ではあるが、近畿地方の布留式土器も検出されている。これらは古墳出現前後における活発な人々の交流を物語るものであり、北信地域における古墳出現期の様相を追及するうえで、極めて重要な資料となろう。

(文献：長野市教委1991『小島柳原遺跡群中俣遺跡 浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・増田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集)

## ② 中央消防署柳原分署地点

平成3年度に実施された柳原分署移転新築にともなう発掘調査で、調査面積約400㎡を測る。調査地点は区南整地地点の北東にあたり、中俣遺跡想定範囲の北限に位置するものと思われる。調査では弥生時代後期から古墳時代後期にわたる遺構を確認している。検出された弥生時代遺構はすべて後期に比定されるものである。弥生時代中期の遺物は出土しているがこれらにともなう遺構は検出されていない。また古墳時代後期の住居址は区南整地地点においては確認されておらず、付近に存在する水内坐一元神社遺跡などの同時期集落とは別の集落が調査地周辺に展開していたことが明らかとなり、当該期の集落群の展開を考慮するうえで興味ある問題といえよう。

(文献：長野市教委1992『小島柳原遺跡群中俣遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第48集)

## 2 水内坐一元神社遺跡

長野市立柳原小学校校舎移転新築事業にともない調査された遺跡で、中俣遺跡と同一の自然堤防に立地し、将来的には当遺跡の範囲と把握される可能性が高い。弥生時代住居址4軒、古墳時代住居址5軒、平安時代柱穴群・溝跡などが検出されている。弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする中俣遺跡とは構造・時期的にややずれがあり、各時期の集落立地の変遷を考えるうえで重要と思われる。

(文献：長野市教委1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集)

## 3 小島境遺跡

弥生時代中期以降各時代の遺構が検出されている。古墳時代の周溝墓5基が検出されており、これらと同時期の住居址群も検出され、うち3軒から玉造生産関係の遺物が出土している。出土土器群の様相には新潟地方からの影響が色濃く現れ、またS字状口縁台付甕もこれに伴出しており、千曲川流域における古墳時代初頭の土器様相の一端を示す良好な資料といえる。

(文献：青木和明1984『小島境遺跡』『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所他)

## 4 南川向遺跡

主に平安時代集落が検出され、特徴的な遺物としては緑釉陶器皿が出土している。

(文献：長野市教委1988『小島柳原遺跡群南川向遺跡』長野市の埋蔵文化財第25集)

## 5 上中島遺跡

平安時代中期の住居址3軒・溝跡2本と時期は不明確であるが、火葬骨埋葬墓1基が検出されている。当遺跡において、平安時代集落が検出できたことは意義のあるように思える。また平安時代以降に比定されるであろう火葬骨埋葬墓も、検出状況などから「曲物」状の容器に入れ埋葬したものと史料され、注目される遺構である。

(文献：長野市教委1994『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡 小島柳原遺跡群上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集)





### Ⅲ 調 査

#### 1 調査概要

調査は、事業面積1,500㎡中、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い約500㎡について実施した。

弥生時代住居址11軒、古墳時代周溝墓2基、中世溝跡等が検出されているが、まず本遺跡に最初の人活動の痕跡を示すのは弥生時代中期栗林式期である。3軒の住居址が確認されているが明確なのは10・11号住居址の2軒である。特に10号住居址は比較的多量にまとまった遺物を出土しており、栗林式期でも古相を呈している。また、11号住居址も住居址中央に位置する深いピットの存在から同様の時期に比定しうるであろう。

次に住居址が展開するのは弥生時代後期箱清水式期になってからである。確実なもので1～4号・8号の5軒の住居址が確認されている。1～3号住居址に見られる切りあい関係から箱清水式期の中でもある程度の時間幅が考慮されるが、後述する古墳時代初頭同様な量の北陸系土器の存在が確認され注目される。

古墳時代初頭になると本調査地付近は新たに墓域として利用される。2基の周溝墓を検出しているが、近接する中保遺跡が弥生時代中期～後期にかけての居住域の中心であることを考慮するならば本遺跡から北西側に展開する後背湿地の際に墓域が展開する可能性も高く今後の調査によって、重要な所見を提示したものと見えよう。弥生時代後期同様北陸系土器の存在も注目される。

これ以降中世まで遺構の存在は認められないが、1号溝址・3号土壇など中世遺構は柳原遺跡群のなかでは初出であり、本調査地から南1km付近に存在する中世城館・中保城跡との関係も考慮せねばならぬであろう。

図3 調査区全体図 (1:300)

## 2 遺構と遺物

### 1号住居址(図4~6)

弥生時代後期箱清水式期の住居址である。2号住居址・1号土壇の一部を切られ、また北隅は調査区外となる。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と全体に浅い。平面プランは4.00m×3.15mの隅丸長方形住居址である。主柱穴はP1~P4の4本を検出しており、柱穴配置は長軸2.10m、短軸1.10mの4本長方形配列である。P5・P6は出入り口施設に関連すると思われる2本一対の支柱で、P7は貯蔵穴と考えられる。

炉は奥壁側主柱穴間中央やや内よりのところに位置し、深さ3cmほどの地床炉である。焼土ならびに炭化物の堆積が確認されている。

床面は住居址中央付近を中心に、比較的固く締まった状況であった。

覆土から床面にかけて壺(1)・甕(2)・坏(3)が出土している。

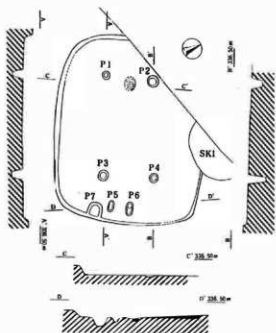


図4 1号住居址実測図(1:80)

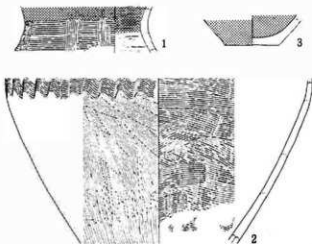


図5 1号住居址出土土器実測図(1:4)



1号住居址

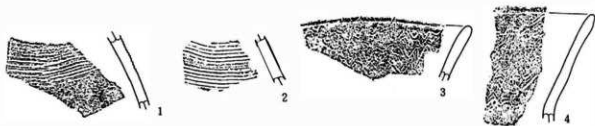


図6 1号住居址出土土器拓影(1:3)

## 2号住居址(図7・8)

1号・3号住居址を切って構築されるが、3号溝址に切られる。また、北側は1/2以上が調査区外となり、詳細は不明な部分が多い。

平面プランは短辺3.70mほどの隅丸長方形と予想される。支柱穴はP1・P2を検出しているが、4本～6本長方形の支柱穴配置が考えられる。

P3・P4は2本一対の出入り口施設に関連する支柱、P5は貯蔵穴的な施設と考えられる。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。

P4東側の壁際床面より大型の壺①と高坏②が見つれた状況で出土している。

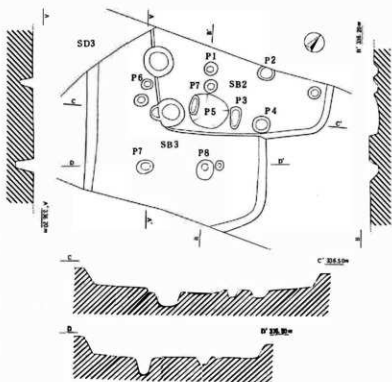
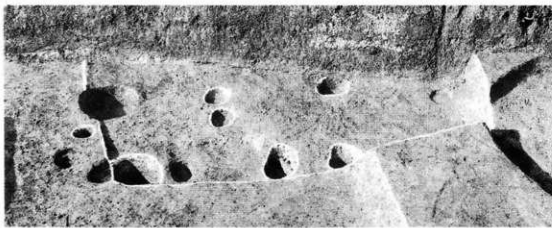


図7 2・3号住居址実測図(1:80)



2号住居址・同遺物出土状況

图9 3号西周出土玉器实测图(1:4)

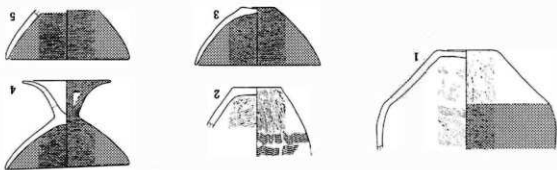
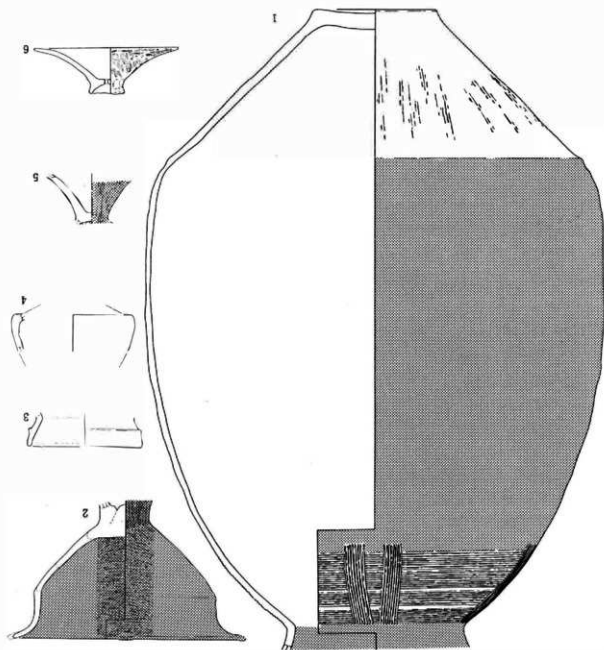


图8 2号西周出土玉器实测图(1:4)



### 3号住居址 (図7・9・10)

2号住居址同様弥生時代後期箱清水期の住居址である。

2号住居址・3号溝址に切れられ、南側は一部調査区外となる。

平面プランは短辺3.80mほどの隅丸方形住居址と考えられる。主柱穴はP6～P9の4本を検出しているが、主柱穴配置は4～6本の長方形配列と考えられよう。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。覆土から床面にかけて壺(1)・甕(2)・坏(3)・高坏(4・5)が出土している。



3号住居址



図10 3号住居址出土土器拓影(1:3)

### 4号住居址 (図11~13)

弥生時代後期箱清水期の住居址である。

北側は1号溝址に切れられ、西側は若干が調査区外となる。

平面プランは4.20m×3.85mの隅丸長方形住居址である。主柱穴はP1～P4を検出している。主柱穴配置は長軸1.90m、短軸1.75mの長方形配列であるが、P2に対応する柱穴が検出されていない点よりすればP1・P3・P4による4本長方形配列の可能性が高い。P5・P6は出入り口施設に関連する二本一對の支柱、P7は貯蔵穴と想定される。P7の北側に壺(1)が床面上より正位の状態出土している。

奥壁側柱穴間中央内よりのところに地床跡が検出されている。床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻な状況であった。確認面からの掘り込みは深く平均30cm前後を測る。

覆土中層から床面にかけて比較的多量の土器が出土しているが、北陸系と考えられる壺(2)・甕(4)は注目される。

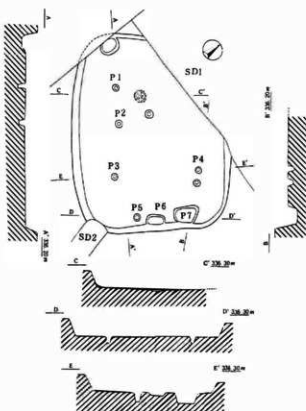
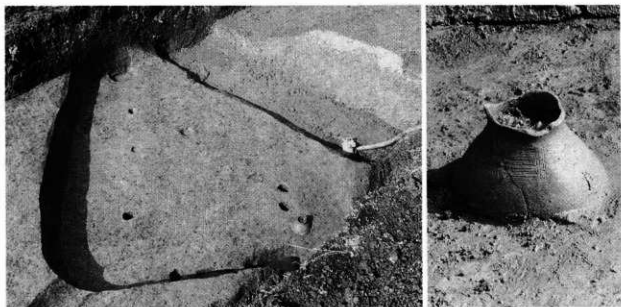


図11 4号住居址実測図(1:80)



4号住居址·同土器出土状况

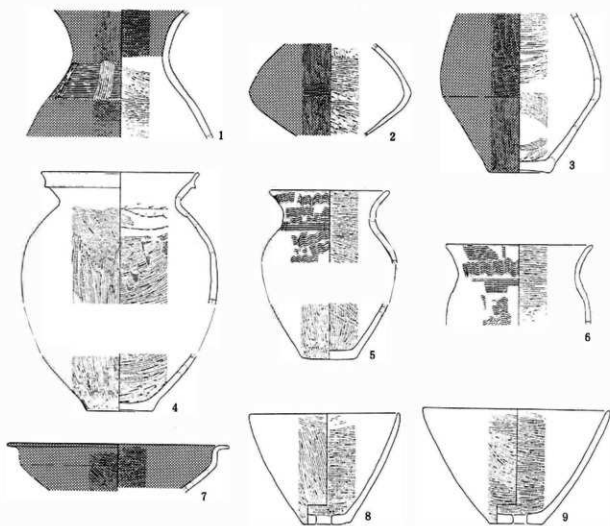


图12 4号住居址出土土器实测图(1:4)

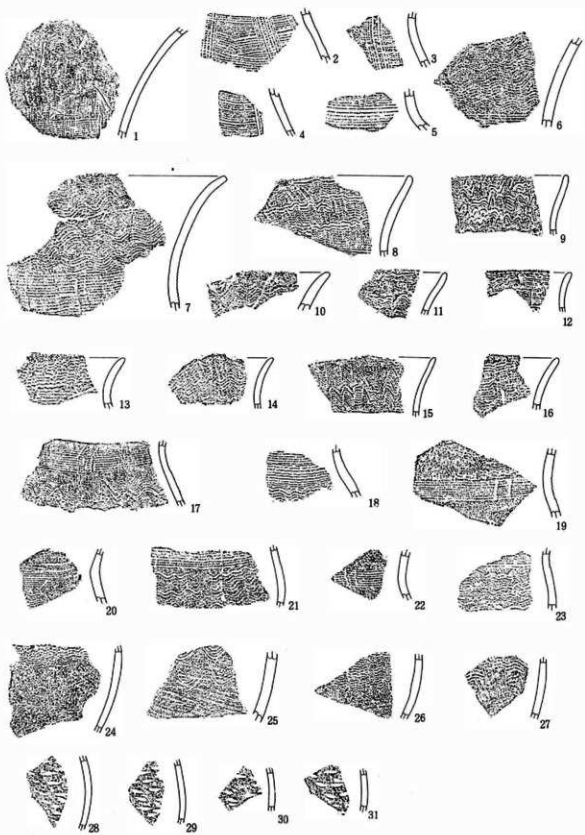


图13 4号住居址出土土器拓影(1:3)

### 5号住居址 (図3・14)

弥生時代後期箱清水式期の住居址である。6号住居址を切って構築されるが大半を4号溝址に切られ詳細は不明である。

平面プランは長辺4.00mほどの隅丸長方形住居址と考えられる。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであり、柱穴・炉址等の内部施設は検出していない。

住居址南隣の床面上より片口のついた鉢形土器を一点出土している。



図14 5号住居址出土土器実測図

### 6号住居址 (図3)

弥生時代中期葉林式期の住居址と考えられる。5号住居址と4号溝址に大半を切られ詳細は不明である。平面プランは円形住居と考えられるが、柱穴・炉址等の内部施設も検出されておらず、規模も不明と言わざるを得ない。出土土器はいずれも小破片で、図示しうるものは無い。

### 7号住居址 (図3)

当初住居址を想定して調査を進めたが、柱穴・炉址等の内部施設が検出されずまた床面の状況も不明瞭なものであり、性格不明の竅穴状遺構である。平面プランは4.10×2.80mほどの隅丸長方形を呈し、確認面からの掘り込みは平均20cm前後である。弥生後期箱清水式期の土器破片を若干出土しているが、時間等明確にしうるものは無い。

### 8号住居址 (図15・16)

弥生時代後期箱清水式期の住居址である。

北側は10号溝址に切られ、南側は大半が調査区外となり詳細は不明な部分が多い。

平面プランは短辺で3.60m前後の隅丸長方形住居址と予想される。主柱穴はP1を確認したのみだが4本長方形配列が予想される。炉は地床炉で奥壁側柱穴間中央壁よりに位置するものと思われる。確認面からの掘り込みは深く西側で平均50cm、東側で30cmを測る。床面は全体に比較的堅緻な状況であった。

かなりの土器破片が出土しているが図示しうるものは少ない。

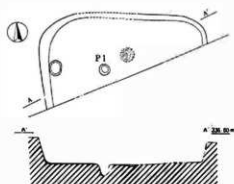


図15 8号住居址実測図 (1:80)

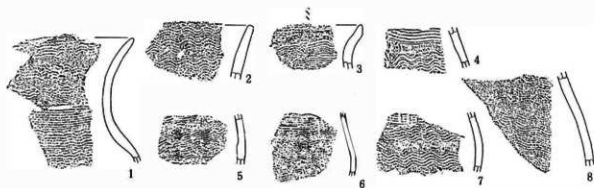


図16 8号住居址出土土器拓影 (1:3)





8号住居址



9号住居址

9号住居址 (図3・17)

南側は大平が調査区外となり詳細は不明である。平面プランは短辺2.20mほどの隅丸長方形もしくは隅丸方形と予想される。確認面からの掘り込みは深く平均40cm前後である。柱穴・炉址等の内部施設は確認されておらず住居址とする積極的な根拠は無い。箱清水式を中心とする土器破片が出土しており、弥生時代後期に比定される。



図17 9号住居址出土土器実測図(1:4)

10号住居址 (図18~21)

弥生中期栗林式期の住居址である。1・9号溝址に切れ南側は調査区外となる。

径4.50mほどの円形住居址と考えられ、主柱穴はP1~P4の同心円状の配列が予想される。P5は0.90×0.80mの不整形な掘り込みである。炉址等その他の施設は確認されていない。覆土下層から床面にかけて比較的多量の土器を出土しているが、栗林式の中でも古相を呈している。

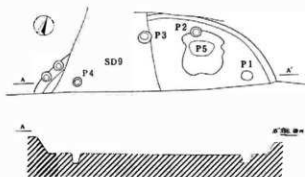


図18 10号住居址実測図(1:80)

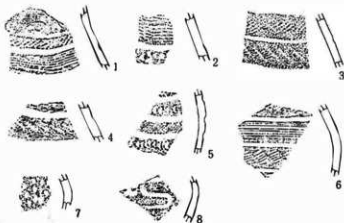


図19 10号住居址出土土器拓影①(1:3)



10号住居址

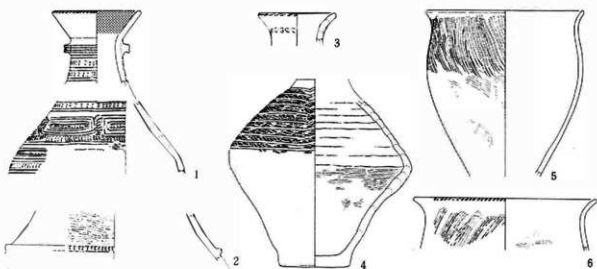


図20 10号住居址出土土器実測図(1:4)

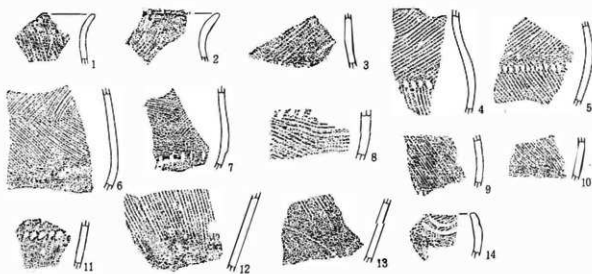


図21 10号住居址出土土器拓影②(1:3)

11号住居址 (図22・23)

6号溝址・11号溝址・7号土壌に切れ東側は調査区外となる。

弥生時代中期栗林式期の住居址で、平面プランは4.80×5.00mほどのやや不整な円形住居址と考えられる。主柱穴はP1～P6を検出しており、7～8本の同心円状の主柱穴配置が予想される。炉は住居址中央やや南よりに位置し、深さ28cmと非常に深い掘り込みで、内部には灰と炭化物が充満していた。床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻な状況を示していた。

床面上より若干の土器破片が出土している。



11号住居址

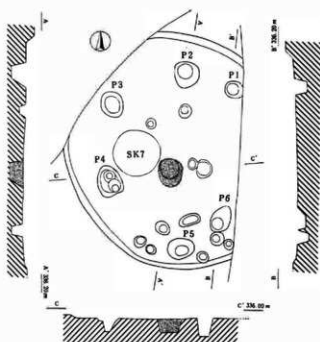


図22 11号住居址実測図 (1:80)

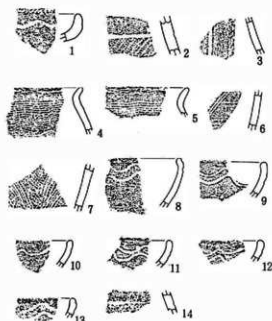


図23 11号住居址出土土器拓影 (1:3)

1号溝址 (図3・24)

調査区内をほぼ東西方向に直線的に横切る中世の溝址である。東側はほぼ完掘しえたが、西側は湧水著しく南側の立ち上がりを確認したとどまった。完掘した東側の所見からは、確認面での幅は2.00~2.20m、溝底幅0.85~1.00mほどで深さは平均50cm前後である。断面は逆台形状を呈する。溝底付近から、内耳土器やカワラケ皿を出土しており、また獣骨片も比較的多量に出土している。

2号溝址 (図3)

調査区東側で南北方向に12m程検出された溝址である。幅50cm前後、深さ5cm前後の小規模なものである。土器小破片を若干出土しているが時期を特定しうるものは無い。

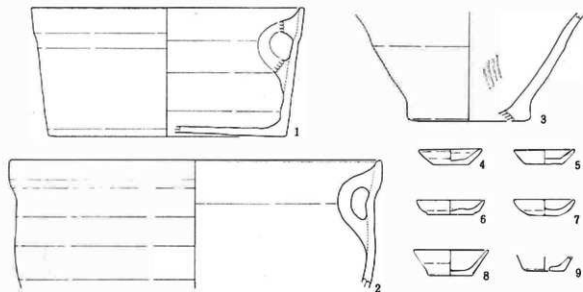


図24 1号溝址出土土器実測図 (1:4)



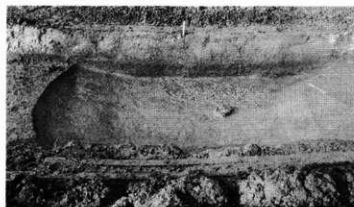
3号・4号溝址（1号周溝墓）（図25～27）

調査区東北隅にて検出されたもので、溝幅最大5.10m、周溝規模最大長20m強、周溝区画内の内法一辺約13mを測る大型の周溝墓である。

周溝開口部は調査区外となり不明であるが、出土土器の時期からして、周溝開口部が突出した前方後方形を呈する周溝墓と考えられる。主体部は確認されていないが、周溝の深さは最深で30cm前後である。

周溝底に接する形で底部穿孔された壺(1)やその他の壺(2・3)が出土しており、2・3号住居址など弥生時代後期の住居址を切って構築されている点や、出土土器の様相により、古墳時代初頭の所産と考えられる。

図25 1号周溝墓実測図（1：150）



3号溝址（1号周溝墓）



4号溝址（1号周溝墓）



土器出土状況

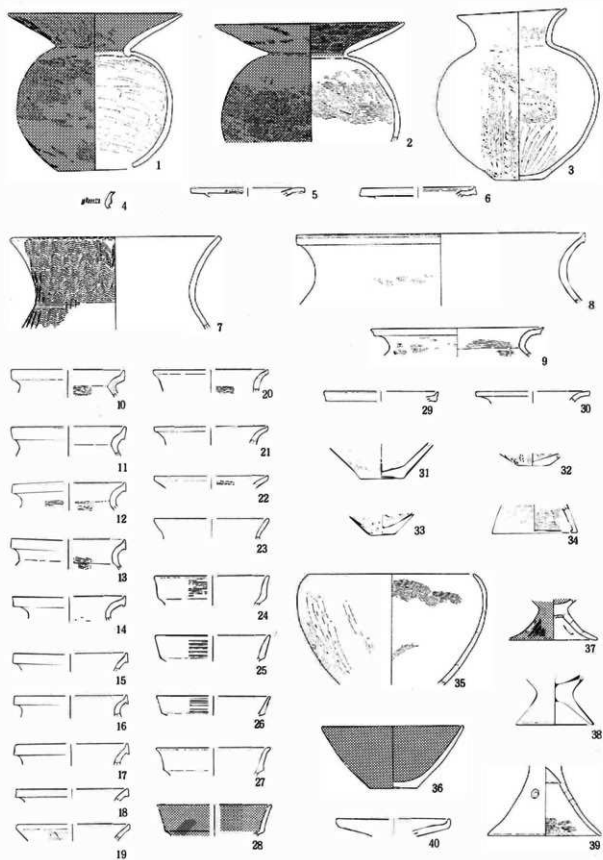


图26 3号·4号溝址(1号周溝墓)出土土器实测图(1:4)

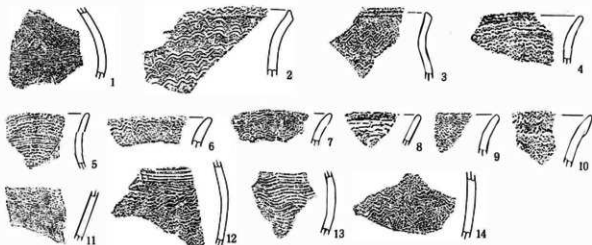


図27 3号・4号溝址(1号周溝墓)出土土器拓影(1:3)

5号溝址 (図3)

調査区東側にて検出された溝址で、北東から南西方向へ直線的に伸びる形態を呈する。検出した長さは6.50mほどで、幅平均40cm、深さ5cmほどの小規模な溝址である。若干の土器破片を出土しているが、明確に時期を特定しうる遺物はない。

6号溝址(2号周溝墓) (図28~30)

調査区東側にて1号周溝墓に隣接する形で検出された。西側は大半が調査区外となり詳細は不明である。溝幅最大1.60m、想定周溝規模最大長10m前後、周溝区画内の想定内法一辺8m前後を測る周溝墓である。周溝開口部は調査区外となり不明であるが、1号周溝墓同様周溝開口部が突出した前方後方形を呈する周溝墓と予想される。セクションから若干の墳丘盛り土が確認されている。



6号溝址(2号周溝墓)

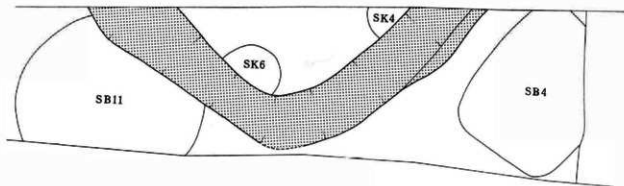


図28 6号溝址(2号周溝墓)実測図(1:100)

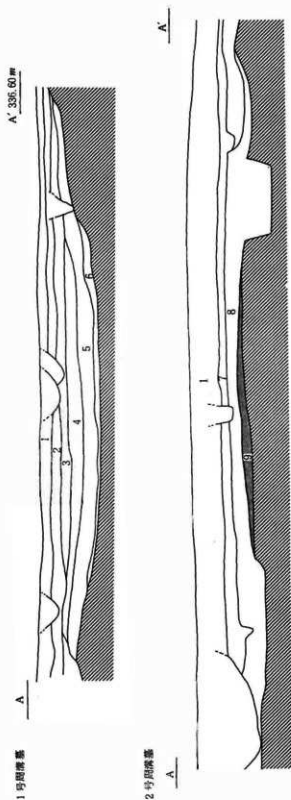


图29 周溝墓土層断面图 (1:60)

### 土層說明

1. 耕作土
2. 淡黃褐色粘質土(炭化物混)
3. 灰黑褐色粘質土(粘性強)
4. 暗黑褐色粘質土
5. 黑褐色粘質土(周溝覆土、粘性強)
6. 灰黑褐色粘質土(周溝覆土)
7. 淡黃褐色粘質土(炭化物混)
8. 黑褐色粘質土(周溝覆土、粘性強)
9. 黃褐色シルト質粘土+黑褐色粘質土  
(墳丘盛土)

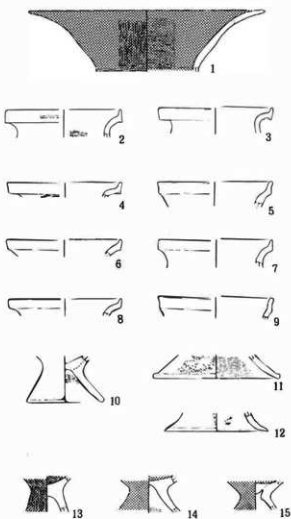


图30 6号溝(2号周溝墓)出土土器実測图(1:4)

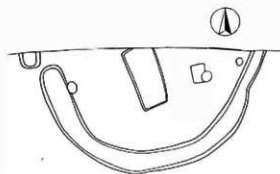


図31 7号溝址実測図(1:100)



7号溝址

#### 7号溝址 (図31)

当初弥生時代後期の円形周溝墓を想定して調査を進めたが、明確に周溝墓と想定する積極的な根拠は無い。

径約6mの円形の周溝で、西側に一か所不連続部分が存在する。溝の掘り込みは浅く平均5~10cm前後である。中央に1.70×1.80mの長方形の土壌が存在する。深さは10cm前後と浅く、墓壇主体部を想定させる痕跡ならびに遺物は出土していない。

全体に出土遺物は少なく、弥生後期土器破片が若干出土しているのみである。

#### 9号溝址 (図3)

10号住居址を切るが、1号溝址に切れ、長さ2mほどを検出したにすぎない。

確認面での幅は北側で1.30m、南側で2.30mと南側が大きく広がり、深さは平均25cm前後である。弥生後期の土器破片を若干出土しているが、明確に時期を規定するものはない。

#### 10号溝址 (図3)

8号住居址の上層を切って構築される。幅平均2.10m、深さ35cm前後の比較的大規模な掘り込みの溝址で断面は逆台形状を呈する。かなりの量の弥生後期の土器破片が出土しているが、8号住居址からの混入が大半であり、明確に時期を規定するものはない。

#### 12号溝址 (図3)

南北方向に直線的にのびる溝址だが、長さ2mほどを確認したにすぎない。幅90cm、深さ50cm前後の規模で、断面逆台形状を呈する。内耳土器の破片を出土しており中世の所産と考えられる。

#### 1号土壌 (図3)

1号住居址を切るが、北側は調査区外となり½ほどを検出したにすぎない。径1.50mほどの円形土壌で、深さは平均20cm前後である。弥生後期の土器破片を若干出土しているが、1号住居址からの混入で、時期は不明である。

#### 2号土壌 (図3・32)

径1.30m、深さ40cm前後の円形土壌である。内部より小型器台の破片が出土しており、古墳時代初頭に比定される。



図32 2号土壌出土土器



3号土壇 (図3)

0.50×0.45mのやや不整な長方形の土壇で、深さ15cm前後である。覆土上層より、小型の木製漆塗り碗が出土しており、中世の所産と考えられる。



図33 5号土壇出土土器

4号土壇 (図3)

6号溝址に切れられ、若干を検出したにすぎない。径0.80mほどの円形土壇と予想され、深さは平均25cmである。弥生後期土器、土師器破片を出土しているが、時期は特定できない。

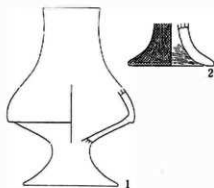


図34 6号土壇出土土器

5号土壇 (図3・33)

6号溝址底面に検出された土壇で、1.10×0.90mのやや不整な円形土壇である。掘り込みは深く72cmを測る。覆土上層より壺形土器が出土しており、弥生時代終末～古墳時代初頭に比定される。

6号土壇 (図3・34・35)

6号溝址に切られる。径1.70mほどの円形土壇で、掘り込みは深く70cmを測る。覆土内より比較的多量の土器が出土しているが、弥生時代終末の所産と考えられる。

7号土壇 (図3)

11号住居中に検出されたもので、11号住居址を切っている。径0.95mの円形土壇で掘り込みは深く70cmを測る。弥生後期の土器破片が出土しており、同時期に比定される。



図35 6号土壇出土土器拓影(1:3)

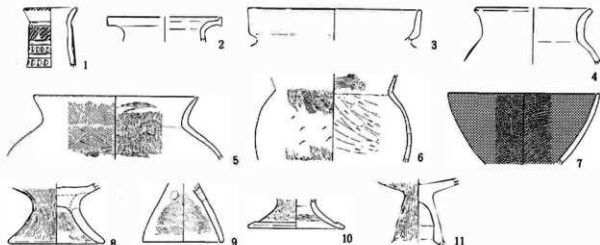


図36 遺構外出土土器実測図(1:4)

番 号	器 種	法 量 (cm)			遺 存 度	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口 径	底 径	器 高		外 面	内 面	
1 号 住 居 址								
1	壺					ヘラミガキ・赤彩、2本一對の櫛描T字文	ヘラミガキ・赤彩	
2	甕					ハケ→縦ヘラミガキ、櫛描波状文	ハケ→ヘラミガキ	
3	坏		5.7			ケズリ→ヘラミガキ・赤彩、底面：ケズリ→ナデ	ヘラミガキ・赤彩	
2 号 住 居 址								
1	壺		13.0			胴上部：ヘラミガキ・赤彩、胴下部：ハケ→ミガキ 又本一對の櫛描T字文	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ナデ	
2	高 坏	24.0				ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
3	壺					口縁：横ナデ、頸部：横ナデ	口縁：ミガキ 胴部：ハケ	
4	壺					ミガキ	ナデ?	
5	高 坏					ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
6	蓋	15.4		4.8		ハケ 焼成前穿孔1	ナデ	
3 号 住 居 址								
1	壺		6.0			胴上半：ハケ→ヘラミガキ・赤彩 胴下半：ハケ→ヘラミガキ	ハケ	
2	甕		5.2			ハケ→ヘラミガキ、櫛描波状文2	ヘラミガキ	
3	坏	13.3	3.4	6.1		ケズリ→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
4	高 坏	13.0	9.4	8.4		ヘラミガキ・赤彩、三角形透孔3	坏部：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ナデ	
5	坏	13.0				ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
4 号 住 居 址								
1	壺					ヘラミガキ・赤彩、櫛描T字文	口縁：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ヘラミガキ	床
2	壺					ヘラミガキ・赤彩	ケズリ→ヘラミガキ	覆土
3	壺		6.0			ヘラミガキ・赤彩	上半：ヘラミガキ、下半：ハケ→ナデ	〃
4	甕	16.2	7.0			口縁：ヨコナデ、胴部：ハケ→ヘラミガキ	口縁：ナデ、胴部：ケズリ→ハケ→ミガキ	〃
5	甕	12.2	5.6			ミガキ、櫛描波状文→櫛描波状文	ヘラミガキ	〃
6	甕	15.4				櫛描波状文・波状文	ヘラミガキ	〃
7	高 坏	23.4				ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	〃
8	瓶	15.7	5.0	11.7		ヘラミガキ、焼成前穿孔1	ヘラミガキ	床
9	瓶	19.6	5.6	17.2		ヘラミガキ、焼成前穿孔1	ヘラミガキ 部分的に赤彩	床
5 号 住 居 址								
1	片口鉢	14.0	4.6	10.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
9 号 住 居 址								
1	甕		18.0			ナデ	ナデ	
2	台付甕		10.6			ヘラミガキ	体部：ミガキ、胴部：ハケ→ナデ	
10 号 住 居 址								
1	壺	9.0				突帯→キザミ、工字文→ヘラ列点文→ミガキ	口縁：赤彩、胴部：ナデ	
2	壺					ヘラミガキ、突帯→キザミ	ナデorミガキ	
3	壺	8.0				口唇：LR縄文、頸部：半月形連続刺突	ヨコナデ	
4	壺		7.4			RL縄文地文→ヘラ連弧文、ヘラミガキ	ハケ→ナデ	
5	甕	16.6				ハケ→ミガキ、櫛単斜条痕	ヘラミガキ	
6	甕	19.2				口唇：LR縄文、胴：櫛単斜条痕or横位羽状文	ハケ→ヘラミガキ	
1 号 溝 址								
1	内 耳	28.8	25.2	13.7		ナデ、スス付着	ナデ	
2	内 耳					口唇部面取、ナデ、スス付着	ナデ	

出土土器観察表①

番号	器種	法 量 (cm)			遺存度	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備考
		口 径	底径	器高		外 面	内 面	
3	撞鉢		12.7			ロクロナデ	ロクロナデ	
4	皿	6.5	3.8	1.7		ロクロナデ、底部：糸切り	ロクロナデ	
5	皿	6.4	3.8	1.5		ロクロナデ、底部：糸切り	ロクロナデ	
6	皿	7.0	4.8	1.7		ロクロナデ、底部：糸切り	ロクロナデ	
7	皿	6.4	3.2	1.7		ロクロナデ、底部：糸切り	ロクロナデ	
8	皿	7.8	4.8	2.7		ロクロナデ、底部：糸切り→ナデ	ロクロナデ	
3号・4号溝址(1号周溝墓)								
1	壺	18.6	8.2	16.5		口縁：ハケ、胴部：ハケ→ミガキ、底部：焼成前穿孔、赤彩	口縁：ミガキ・赤彩、胴部：板ナデ	
2	壺	20.0				口縁：ハケ→ミガキ、胴部：ハケ→ミガキ、赤彩	口縁：ミガキ・赤彩、胴部：ハケ	
3	壺	11.5	5.2	17.8		口縁：ハケ→ナデ、胴部：ハケ→ズリ→ミガキ、底部：ケズリ	口縁：ハケ→ナデ、胴部：ハケ→ケズリ	
4	壺					突帯→ヘラキゼミ	ナデ	
5	壺							
6	壺					口縁：つまみ上げ、強ヨコナデ	強ヨコナデ	
7	甕	22.0				口縁：波状文1、櫛描葉状文→櫛描波状文	ヘラミガキ	
8	甕	30.4				口縁端部：擬凹線、口縁：ハケ→ナデ?	ナデ?	
9	甕	18.2				口唇：強ヨコナデ、口縁：ハケ→ナデ?	ハケ→ナデ	
10	甕					口縁：ヨコナデ、ナデ	ハケ→ナデ	
11	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
12	甕					口縁：ヨコナデ、胴部：ハケ→ナデ	口縁：ヨコナデ、胴部：ハケ	
13	甕					ヨコナデ	口縁：ヨコナデ、胴部：ハケ	
14	甕					ヨコナデ	口縁：ヨコナデ、胴部：ケズリ	
15	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
16	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
17	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
18	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
19	甕					口唇：ヨコナデ、口縁：ハケ	ヨコナデ	
20	甕					ヨコナデ	口縁：ヨコナデ、胴部：ハケ	
21	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
22	甕					ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
23	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
24	甕					強ヨコナデ	ヨコナデ	
25	甕					擬凹線、ナデ	ヨコナデ	
26	甕					擬凹線、ナデ	ヨコナデ	
27	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
28	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
29	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
30	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
31	甕		4.6			ハケ	ハケ	
32	甕		3.4			ハケ、底面：ケズリ	ハケ	
33	甕		2.6			ハケ→ケズリ	ハケ	
34	台付鉢		9.0			ハケ→ナデ	ハケ	
35	鉢	17.4				縦ケズリ→ナデ	ハケ→ミガキ	

出土土器観察表②

番号	器種	法 量 (cm)			遺存度	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備考
		口 径	底 径	器 高		外 面	内 面	
36	坏	14.8	5.0	6.6		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
37	高 坏		9.4			ハケ→ヘラミガキ・赤彩、三角形透孔5	坏部：ヘラミガキ・赤彩、脚部：ナデ	
38	台付甕		8.4			ヘラミガキ	胴部：ヘラミガキ、脚部：ナデ	
39	高 坏		12.0			ヘラミガキ、円形透孔3	ハケ→ナデ	
40	器 台					ミガキ	ミガキ	
6号溝 (2号周溝墓)								
1	壺	25.2				ヘラミガキ・赤彩、佛指T字文or直線文	ヘラミガキ・赤彩	
2	甕					縦凹線、ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
3	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
4	甕					ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	
5	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
6	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
7	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
8	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
9	甕					ヨコナデ	ヨコナデ	
10	台付甕		7.6			ナデ	胴部：ナデ、脚部：ハケ→ナデ	
11	高 坏		13.2			ハケ→ヘラミガキ	ハケ→ナデ	
12	高 坏		11.0			ハケ→ヨコナデ	ハケ	
13	高 坏					ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、脚部：ナデ	
14	高 坏					ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、脚部：ハケ・ナデ	
15	高 坏					ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、脚部：ナデ	
2 号 土 埴								
1	器 台	10.0				ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
5 号 土 埴								
1	甕	17.4				ヨコナデ、ハケ	ハケ→ヨコナデ	
6 号 土 埴								
1	壺					剥落詳細不明	剥落詳細不明	
2	器 台		9.0			ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・ナデ	
遺構外出土器								
1	壺	5.2				沈線区画→L・R縄文・半月形連続刺突	剥落詳細不明	
2	壺					ヨコナデ	ヨコナデ	
3	甕	18.4				剥落詳細不明	剥落詳細不明	
4	甕					剥落詳細不明	剥落詳細不明	
5	甕	17.4				ハケ	ハケ	
6	甕					ハケ→ケズリ	口縁：ハケ、胴部：ケズリ	
7	壺	16.0				ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
8	台付甕		10.0			ハケ→ヘラミガキ	胴部：ミガキ、脚部：ハケ	
9	高 坏		8.6			ハケ、円形透孔	ハケ	
10	高 坏		10.2			ヘラミガキ	ハケ→ナデ	
11	高 坏					ヘラミガキ	ナデ	

出土土器観察表③



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	こじまやなぎはらいせきぐん みやにしせいせき							
書名	小島柳原遺跡群 宮西遺跡							
副書名	長野電鉄株式会社・株式会社長野ジャンイ中俣住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第64集							
編著者名	千野 浩 寺島 孝典							
編集機関	長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）							
所在地	〒381-22 長野市小島田町1414 長野市立博物館内 Tel. 0262-84-0004							
発行年月日	1994年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°	調査期間	㎡	調査原因
宮西遺跡	長野市大字柳原 字宮西			36度 39分 33秒	138度 15分 12秒	1994年1月 20日～2月 24日	500	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮西遺跡	集落	弥生・古 墳・中世	住居址 11軒 周溝墓 2基 溝 址 11条 土 壇 7基		弥生土器・土師器			

長野市の埋蔵文化財第64集

小島柳原遺跡群 宮西遺跡

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月30日 発行

編 集 長 野 市 教 育 委 員 会

発 行 長 野 市 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 ㈱長野プリントサービス